

深浦会東京だより

第14号

深浦会東京 事務局
〒154-0011 東京都世田谷区上馬4-23-7
トボス M. 駒沢102
TEL 03-3418-0914
FAX 03-3422-0483

第8回定期総会・交流会

深浦会東京

「深浦会東京」の第8回定期総会・交流会は、本年5月3日午後1時から東京品川区立総合区民会館「きゅりあん」にて、関東在住の深浦町出身者を中心に構成する会員約二八〇名と、故郷の深浦から町・議会や農協、商工会などから約四〇名が出席し、盛大に開催されました。

定期総会では平成11年度活動・会計・監査報告及び平成12年度活動計画や予算案を審議し、議案通り承認されました。

平成11年度活動は、①「深浦出身大相撲を励ます会」(仮称) 結成への協力の会員名簿の調査・整備②第九回定期総会・交流会の準備など承認されました。黒滝 進会長は「ふるさとを懐かしみ楽しい交流を行い、深浦町の発展に貢献できるよう努力したい」と挨拶を引き続き、町の振興・発展に向けた取り組みの紹介を交え平沢敬義町長が「町の現状を紹介した後、今日は、懐かしいふるさとを味わいたい」と祝辞を述べられた。

今回の総会・交流会では、深浦町の振興アドバイザーやパートナーとして活動する「のぼる夕陽のふかから大使」に、奈良岡紘子氏、福澤久美氏、富沢信一氏、二代目藤田周次郎氏の四名が、平沢



深浦会東京の役員全員集合

町長から認定証を授与されました。

交流会の会場は、深浦からの直送便・サザエやヒラメの刺身、ホッケのすり身汁、紅鮭の飯寿司などの「郷土料理」がテーブルいっぱい。参加者はそれぞれに懐かしい料理に舌鼓を打ちながら久しぶりに会う友達らと近況を語り合っていました。

今回は町から深浦ママさんコーラスグループが初参加し「深浦讃歌」など心にひびく歌声を披露したほか、郷土力士の海鵬 関や安美錦関、安壮富士氏も参加。また、恒例となったウェスパ椿山新こテージの宿泊券や深浦特産品が当たる「福引き大会」など盛りだくさんイベントの中で、それぞれに楽しいひとときを過ごした。最後に、全員で「ふるさと」を大合唱して、来年の再会を約束し、会場を後にしました。

来年の総会・交流会の日程決まる!!
平成13年6月24日(日)に(詳細については後日)ご案内致します。

深浦町からお知らせ

「磯野 弘 文庫」が誕生しました!

今年8月、船橋市在住の磯野弘さんより、船に関するたくさんの蔵書を寄贈いただきました。寄贈式には磯野さんが来町され、町長、教育長と懇談、引渡しをいただきました。磯野さんは、昭和21年天津から引き上げ、母方の故郷である深浦町に3年間疎開されました。戦後の混乱期に深浦の方々から数々のお世話をいただいたお礼をしたい、と考えていた矢先、今年5月に開催された深浦会東京総会・交流会で北前船を展示している「北前の館」の存在を知り、ご自分が研究のために収集された船に関する蔵書を寄贈されたものです。

町では、歴史民俗資料館内に「磯野文庫」を設け、町民のみならず一般参観者にも公開しております。会員の皆さんも、帰郷の折にでもどうぞご利用ください。

「いつも心の中で歌をうたいましょう」

深浦ママさんコーラス 代表 葛西 美智子

深浦会東京会員の皆様、お変わりなくお過ごしのことでしょうか。月日はまこと水の如くに流れ、風薫る好季、5月3日、品川きゅりあんの会場に胸を弾ませ、和やかな心のふれあいと歓談のひとときを浸らせていただきましたこと、序文にて厚くお礼申し上げます。

日本列島、今年は何処もっだるような夏でございましたが、11月を迎えますと紅葉もひときわ色を増し、冷気が急に加わった感じが致します。深浦は、落日の浜に幾人の思

い出が波と消え、躍動の日々を遠くし、追憶だけが波音に甦るこの頃でございます。

さて、初参加させていただきますママさんコーラス部員十名は、深浦生まれが五名、県内外身、その内、私は京都府舞鶴市から運命の糸に引張られ、深浦が第二のふるさとになってしまいました。交通の便が良くなり、高度成長した今では深浦も他県、大都市との交流も深まり、都会の風が吹き流れております。大志を抱き、ふるさとを遠くして自分の城を築き上げられた振り願み苦勞の日々に胸を打たれ、皆々様の笑顔、お名前を思い出しながら、深浦を忍ぶ思いに輝いていた会場の様子が、今、目に浮かび消えていきます。

無我夢中に歩んでいる日々は、振り返ることを忘れ、面白さに世風をかき分け、自分史を積み上げてまいりました。

最後に、深浦町長様を始め企画課の皆様、何かから何までお力添え下さいましたこと、ありがとうございます。

コーラス部員を代表いたしまして、お礼を申し上げます。

事務局からです

1. 「広報ふかうら」購読申し込みご希望の方へ

深浦町で毎月発行しております。ふるさとの情報がいっぱい会員には大好評です。ひきつづき購読希望の方、新規購読希望の方は同封の郵便振替用紙にて、年間購読費2,000円をお振込みください。振込手数料はかかりません。(当会負担)

2. 投稿のお願い

「広報ふかうら」「深浦会東京だより」への投稿を募集しております。内容は一切問いません。投稿ご希望の方大歓迎。活字数……800字位、写真をそえてください。事務局迄ご郵送ください。投稿を頂いた方には、テレホンカード(深浦の風景)を贈呈いたします。

3. 住所変更、姓名が変わった方は忘れずに事務局迄ご連絡してください。

4. 名簿提出のお願い

当会では、町出身者にできるだけ沢山ふるさとのたよりを届けるべく努力しておりますが、まだまだ、名簿もれの方が多数おられるようです。同期会、同窓会等の名簿をお持ちの方は事務局迄ご連絡いただきたくお願い申し上げます。

5. 会報への「広告」を募集しています。

ご希望の方は事務局迄ご連絡ください。

◆連載◆

深浦の歴史連載③

今甦る中世戦国の深浦
2. 中世戦国期の深浦の城館址

① 安藤氏の蝦夷ヶ島撤退、そして秋田移住
鎌倉・南北朝・室町・戦国時代の深浦の歴史は、十三湊を本拠地として、津軽西浜・外ヶ浜・下北・蝦夷ヶ島南部に強力な支配勢力を有した、下国安藤一族の活躍のときでもあった。

この安藤氏も、南北朝からおよそ百年にわたって抗争を続けてきた糠部群(岩手県北部から青森県三八・上北地域)を本拠地とする大豪族の南部氏の一大攻撃を受け、武運拙なく、嘉吉三年(一四四三)に津軽半島の小泊・柴崎城の合戦を最後に、父祖の地津軽から蝦夷ヶ島(茂別館)上磯町、松前城上磯町、松前城下磯町など、南部地域に撤退した。数回にわたって津軽奪回合戦にも敗れた下国安藤一族は、十三年後の康正二年(一四五六)政季のとき、深浦・関の折曾の関館から秋田に進出した安東鹿野の孫(上国・湊安東氏)の招きに応じて、男鹿島に移住した。この時に、西浜折曾の関及深浦の安藤一族・鷹下の武将の多くも同行したと考えられる。その後、蝦夷ヶ島からの安藤氏は、能代・松山城に在って安東屋形となって戦国期を乗り切り、戦国大名となって関が原時代を迎えるのである。

②この時代の深浦の城館址

中世戦国期の城館址として判然としているものは、安藤氏の一族・鷹下の部将、或は安藤氏に属する土地の豪族(土豪・地侍)が支配していたと思われる折曾の関館址(大字関)、有間館址又は吾妻館址(大字深浦・吾妻)、尾ノ上山大館址(大字深浦・岡町)、元城館址(大字深浦・六角浜)の四ヶ所である。

上記の外には、大字風合瀬・館村の浜館址、大字轟木・塩見崎の唐土野木館址、大字追良瀬塩見形の追良瀬館址、大字深浦岡崎の日和見山館址外二ヶ所ぐらいが挙げられているが、いずれも詳細な調査が行われておらず、何一つとして具体的なことは解っていない。前の四ヶ所以外の館址については、通言で言われていることは、安藤氏が北方世界の海上を制覇して、船舶の航海と湊浦溜溜及び交易の安全を図るための、保護視海の館址類であろうと云うことである。

この時代(合戦崩れの浪人達が九州・四国・京坂・東海・瀬戸内・北陸から北方地域に入り、目の前の日本海には大小の船々の真帆片帆が賑わしく、地侍や土農の別ない時代の地元の人達は遅くこれに対処していた。こうして深浦・金井ヶ沢の湊泊は、最重要の地として城館が築造されていた。(城館の詳細は次号)

